

## 第5章 総括

発掘調査の結果、竪穴建物跡9棟、井戸跡1基、土坑19基、溝跡10条、柱穴51基、性格不明遺構2基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石器、鉄製品、鉄生産関連遺物、銭貨が出土した。上記の成果から、主に平安時代の集落跡であることが判明した。ここでは第1節で縄文時代の遺物、基本土層と自然科学分析からみた遺跡の成り立ちについて、第2節で平安時代の遺構と遺物について、第3節で中世以降の遺物について、時期毎に総括を行う。

### 第1節 縄文時代

今回の調査では、縄文時代前期と後期の土器が出土した。いずれも一定量の出土が認められることから、当該期に本遺跡周辺で人々の活動があったものと思われる。出土土器はいずれも遺存状態が悪く、遺物のみから言えることは非常に少ないが、出土状況や出土層位、自然科学分析の結果を踏まえ、本調査区における縄文時代の土地利用状況について復元を試みたい。

#### 遺跡の立地と堆積過程

本遺跡は、飯詰川の活動により左岸の河成段丘と右岸の海成段丘の間を埋めるように形成された谷底平野に立地している(第2章参照)。現地表面では、北から南に緩やかに傾斜する微高地状の様相を呈しているが、石田(1)遺跡が立地する河成段丘面よりは一段低い位置に当たる。

1区は、河道の中心付近で堆積した礫層(VII層)と河道の縁辺～外で堆積した粘土層(VI層)の上に、風成粘土層(V層・III a層)が、腐食を多く含む粘土層(IV層)を挟んで堆積する(第2章参照)。基本土層から出土した炭化材による放射性炭素年代測定の結果、V層で縄文時代前期後葉～末葉、IV層で中期前半～後期初頭及び後期中葉～後葉、III a層で後期中葉及び後期後葉～晩期前葉の年代値が得られている(第4章第1節参照)。層序と年代値が整合的であることから、V層～III a層は前期後葉から晩期前葉にかけて、段階的に堆積・形成されたと考えられる。また、平安時代の井戸跡(SE01)から出土したブドウ属種子の放射性炭素年代測定結果は、井戸枠取上後の土壌から抽出したものも含め、4点すべてが縄文時代前期後葉の年代値を示している(第4章第2節参照)。このことは、少なくとも井戸の構築に際し、縄文時代前期の層まで掘削が及んでいたことを示唆する。また、V層出土炭化材が前期後葉～末葉の年代を示していることから、間にあるVI層もほぼ同時期に堆積したと考えられる。

なお、井戸枠内の土壌と、井戸枠取上後の土壌及び外枠外側(掘方埋土)では、植物遺体・昆虫遺体の出土状況にも明瞭な差がある。井戸枠取上後及び外枠外側の土壌からは、イネをはじめとした栽培植物や昆虫遺体はごく僅かしか得られていない。特に昆虫遺体の出土は、外枠外側埋土15点(約0.5%)、外枠内側埋土91点(約3.4%)、内枠内堆積土1,821点(約67.8%)、外枠内堆積土757点(約28.2%)となっており、ほぼすべてが井戸の機能時もしくは廃絶後に混入したものと捉えられる。年代測定試料であるブドウ属種子は、井戸枠内からも出土しているが、VI・VII層を掘り込んで井戸を構築した際に、もともとVI・VII層に包含されていた縄文時代前期後葉の種子が混入したものと理解できる。VII層は確認面から約2m下で湧水を伴う層、VI層は井戸枠付近でグライ化しており、特に下方では地下水位が高いため、動植物遺体は残存しやすい環境にあった。以上を総合的に勘案すると、VI・VII層は縄文時

代前期後葉のある時期に、短期間で河道縁辺を埋め尽くすような、大規模な氾濫により堆積・形成されたと考えられる。1区基本土層2では、VI層が南から北へ向かって傾斜し、基本土層1にはないⅢb～d層の細別層が入る。そのため井戸跡周辺の旧地形は、自然堤防状に周辺よりもやや高く土砂が堆積していた可能性が高い。一方で、井戸跡の検出面がVI層であることから、後世の水田開発等によって削平され、現在の地形となったことがうかがえる。

### 遺物の出土状況

1区では、胎土に繊維を含む土器が、Ⅲa層直上から比較的まとまった状態で出土している。表面は摩耗しており、詳細な文様は不明であるが、残存する特徴から縄文時代前期中葉の円筒下層式の可能性が高い。地層の年代的に逆転した状態での出土であるが、面的にまとまっているため、周辺からの流れ込みとは捉えがたい。前述の基本土層の堆積過程を考慮すると、Ⅶ層が堆積する以前の河川沿いの低地で、縄文時代前期の人々の活動があり、その際に廃棄された土器が河川活動により土砂で覆われ、時を経て、平安時代の人々が井戸の構築時に縄文時代前期中葉の層まで掘削し、埋蔵されていた土器を掘りあげ、それが周辺に廃棄された、という理解が腑に落ちる。

4区では、河道中心付近で堆積した礫層(Ⅲi・l層)と、河道縁辺～外で堆積した砂層(Ⅲh・j・k層)・粘土層(Ⅲe・f・g・m層)が堆積しており、頻繁な河川氾濫により、旧河道が徐々に埋まっていったと考えられる。縄文時代後期初頭の土器が出土した層はⅢe層に当たる。放射性炭素年代測定結果は、Ⅲe層が飛鳥～平安時代、その下のⅢf層が縄文時代後期前葉～中葉の年代を示している(第4章第1節参照)。縄文時代後期初頭に周辺で人々の活動があったものの、生活環境としてはあまり適していなかったと考えられ、集落が営まれるまでは至らなかった。時には周辺でキャンプサイト的な活動があったかもしれず、そのような際に土器が廃棄されたものであろう。平安時代には、河川の活動もやや落ち着き、居住域として利用された。その際、縄文土器が埋蔵されていた地点で掘削が行われ、掘り返された土器が廃棄されたのではないだろうか。4区出土の縄文土器が、ある程度平面的なまとまりを持ちながら、やや上下幅を持って出土した状況は、このように理解できる。

### 周辺の遺跡

本遺跡の南約1kmに位置する狐野(1)遺跡で縄文時代早期後葉の土器が出土しており、これが現時点で本遺跡周辺における最も古い縄文時代の活動痕跡となる(五所川原市教育委員会1980)。縄文時代前期には、河川周辺の低地利用の痕跡が本遺跡の調査成果から指摘できる。北に位置する石田(1)遺跡では、十腰内I式及び晩期の土器が出土している。第3次調査で検出された「第2号竪穴住居跡」は、報告書では平安時代の遺構として扱われているが(五所川原市教育委員会1995、図57)、その形態・規模から縄文時代後期に帰属する可能性がある。十腰内I式期前後に、石田(1)遺跡周辺に小規模な居住域が展開し、時折河川周辺の利用のために一段低い本遺跡周辺で活動を行っていたことが想像される。一方、晩期の土器は、楕円形の土坑を壊して構築された平安時代の竪穴建物跡から出土しており、本来は土坑に帰属するものと考えられる。周辺にも同様の土坑が点在しており、これらは晩期の土坑墓の可能性もある。また、第3次調査の報告書で「平地式住居跡」とされた円形に巡る柱穴(五所川原市教育委員会1995)は、その配置・規模から晩期の壁柱穴構造を持つ大型住居の可能性が高く、石田(1)遺跡が位置する段丘上は、祭祀的な機能を持つ遺構が展開していたと考えられる。飯詰川を挟んで対岸に位置する福泉遺跡では、大洞C1式を主体とする土器が多数出土しており(五所川原市

教育委員会 1983)、本遺跡周辺の段丘上に、晩期の集落が営まれていたと考えられる。

### 縄文時代前期の低地利用について

縄文時代前期の低地利用については、捨て場や水場がよく知られるが、それ以外にも河川近くの低地で活動を行っていた可能性が、本遺跡の調査成果から指摘できる。他にも、河川氾濫原付近の低地で遺物散布が確認される遺跡が、青森平野で散見される。大矢沢野田(1)遺跡は、横内川の氾濫原近くに立地し、河川跡及び前期初頭～中葉の遺構・遺物が見つかった(青森県教育委員会1999・青森市教育委員会2000・2001)。堤川の氾濫原近くに立地する篠塚遺跡では、現地表面より3m以下に堆積した黒色土中から、円筒下層式土器が出土している(青森県教育委員会2017)。いずれも、縄文時代前期の層は現地表面から数m下に埋没しており、通常の調査では端から調査対象として把握されない可能性がある。設楽政健氏は、大矢沢野田(1)遺跡の調査成果を踏まえ、「縄文時代前期初頭～中葉の遺跡が未だ人知れず平野部に眠っている可能性が高い」ことを指摘しているが(青森市教育委員会2001)、河川付近における調査では、厚い河川堆積物の下に遺構・遺物が埋没している可能性も念頭に調査を行う必要がある。

また、三内丸山遺跡第6鉄塔地区の円筒下層a～b式を包含するVIa～VIb層でブドウ属果実が、北の谷の上流域にあたる第12次調査区トレンチの円筒下層a～b式を包含するIII C - 1・2層でブドウ属種子の出土量が増えていることも注目される(辻圭子ほか2006)。三内丸山遺跡の植物利用については、クリの管理やニフトコの集中的な廃棄が耳目を集めてきたが、前期の円筒下層式期において、当時の人々がブドウ属の利用を模索していた可能性が考えられる。(中門)

## 第2節 平安時代

竪穴建物跡は1・4区で確認したが、2・3区では確認できなかった。掘り込み部分の規模が6mを超す大型のものは、1区の掘立柱建物が併設する第7号竪穴建物跡1棟である。その他の規模は大きく3m前後のもの(SI03、08)、5m前後のもの(SI04、05、10)があり、それぞれで主軸方向が揃うため、同時期に営まれた可能性がある。5m前後のものはいずれも1区で検出した。掘方埋土を床面とし、貼床を伴わない。カマドは確認できたもので南側に構築するものが多く、唯一第3号竪穴建物跡が西側を向く。第4・5号竪穴建物跡と第7号竪穴建物跡(新)・(旧)は溝跡(SD01・02・05)によって区画され、いずれも近い場所で重複し、建て替えを行ったことが共通する。第5号竪穴建物跡は南側が新しい建物を作る際に埋め戻され第4号竪穴建物跡の壁として機能する。また第7号竪穴建物跡(旧)のカマドを壊し、部分的に新しい床を貼り直して第7号竪穴建物跡(新)を構築している。また、第7号竪穴建物跡(新)は掘立柱建物が併設しており、竪穴部分を含む南北長は10m以上となる。今回は間隔の整った柱穴のみ掘立柱建物跡として認定したが、第7号竪穴建物跡周辺には他の調査区に比べ溝跡や柱穴が多いため、本遺構に伴う可能性がある。また今回の調査で検出した柱穴は重複するものがないため、第7号竪穴建物跡(旧)から第7号竪穴建物跡(新)へと建て替える際に掘立柱建物を併設したものと判断した。竪穴・掘立柱併用建物は、浪岡・大釈迦地区を中心に外周溝を伴う事例があり、五所川原市隈無(8)遺跡でも確認している(青森県教育委員会2002)。今回の調査では、外周溝を伴っていないが、津軽山地の西麓にも展開することがわかった。

堆積土中で検出した火山灰は自然科学分析を行った。平安時代に降下した火山灰を想定して採取



しており、第10号竪穴建物跡のように1つの土層から黄色と白色、2つの色調の異なる火山灰が確認されることもあった。分析の結果、10世紀前半に降下した白頭山苦小牧火山灰(SI07・08・10)と15.5 calkaBPに降下した十和田八戸火山灰(SI04、SE01)が確認された。白頭山苦小牧火山灰は、出土遺物から想定される年代と合致する。一方で十和田八戸火山灰は遺構内に一次堆積したものではなく流入によるものと考えられる。また色調の異なる火山灰が同じ結果を示したことは、目視による判断だけでなく分析の必要性を示す。放射性炭素年代測定は、8世紀(SI07(新):カマド)、9世紀(SI01:床面、SI04:床面、SI10:カマド前庭部)、10世紀(SI03:堆積土)を示した。第7号竪穴建物跡(新)は、先述した出土遺物や火山灰の年代とずれがあり、古木効果を考慮する必要がある。(藤田)

竪穴建物跡から出土した遺物から遺構間の時期差を見つけることは困難であったが、1区に所在する遺構から出土した遺物と、4区に所在する遺構から出土した遺物が多数接合した事例を確認した(表3)。特筆すべきは第3号竪穴建物跡出土遺物と第10号竪穴建物跡出土遺物が接合する例である。一個体のうち、ほとんどが第3号竪穴建物跡からの出土で、それに少数の第10号竪穴建物跡のものが接合する例が多数みられた。1区と4区は直線距離で約104m離れているが、遺構間接合事例が甚だ多く、出土状況が良好なことから、1区と4区の間で遺物の移動が人為的に行われたと考えられる。以上のことから、当時1区が集落の中心的存在であったことを示唆する。

本遺跡の北に隣接する石田(1)遺跡では平安時代の竪穴建物跡が6棟確認された(図57)。規模が上端で南北軸173cm～567cm、東西軸202cm～627cmでカマドが建物跡の南壁に設置される。建物跡の大きさに大小が存在する点は本遺跡と共通する。出土遺物を概観すると、土師器甕の底面に木葉痕やすだれ状圧痕が観察でき、本遺跡出土遺物より新しい属性が認められた。このことを積極的に捉え、平安時代では、当初本遺跡に集落が営まれ、石田(1)遺跡へと居住域が移動した可能性を示すことができる。(工藤・藤田)井戸跡

第1号井戸跡は、井戸内枠と外枠が組みあったもので、平安時代の井戸跡で県内初の検出事例となった。この他、未炭化の櫛も同様である。遺物や井戸枠の堆積状況から構築状況を考察する。まず湧水する砂層であるⅦ層を掘り込み、遺構底面に直径3～10cmのデイサイトの礫を混ぜ18層を準備する。本層は多量の炭化物の混入や礫を面的に敷き詰めた状況が確認できなかったため、浄化ではなく集水の機能を有したものと考えられる。その後、井戸内枠を設置し、固定と壁面の保護のために裏込めをし、井戸外枠を設置した。井戸外枠は下端部につぶれを確認し、打ち込みによるものと想定

表3 遺構間接合

図	No.	種類	器種	出土位置	層位
18	1	須恵器	甕	SI03	堆積土
				SI10	堆積土
18	3	須恵器	壺	SI03	1層・3層・4層・堆積土
				SI10	堆積土
				4区	Ⅱ層
18	7	土師器	坏	SI10	堆積土
				SI03	2層・3層・堆積土
19	1	土師器	甕	SI03	3層・床面
				SI10	堆積土
				4区	Ⅱ層
20	1	土師器	甕	SI03	5層・8層
				SI10	堆積土
				4区	Ⅱ～Ⅲ層
21	8	土師器	甕	SI03	1層・3層
				SI07	1層
24	9	土師器	坏	SI04	3層
				SK13	堆積土
25	2	須恵器	坏	SI07	3層
				SD04	1層
26	21	土師器	甕	SI07	堆積土
				SK17	1層
27	3	土師器	甕	SI07	3層
				SK17	1層
50	8	土師器	小型甕	SK01	1層
				SK17	2層
50	14	土師器	甕	SK08	3層
				SI07-SK01	2層

できる。また図化できなかったものの、井戸外枠が接合する事例を3例6点確認した(写真図版2下段)。板を加工してから分割したもの(図37-1・2)、板の加工後に分割しその後下端部を加工したものがある(図38-1・2、図40-1・2)。板の側面には楔の痕跡が確認できなかったが、厚みのある板材を分割し必要に応じて井戸外枠を作成したと判断した。また井戸外枠を設置する過程で櫛や箸が埋土に入るが、意図的なものかはわからない。鉤状木製品は、紐を結び井戸掘り上げ土を地上へ運び出す際に使用された可能性がある。井戸は埋没過程において、図42-6が直立した状態で出土したことから、廃絶後に内枠内が一定程度埋まった段階で、意図的に杭を立てたことが窺える。斎串は杭より下層から出土しているものの、井戸内枠の埋没がかなり進行した状態であったと考えられる。

自然科学分析では放射性炭素年代測定と火山灰分析、樹種同定、大型植物遺体同定、動物遺体同定、昆虫化石同定を行った。

放射性炭素年代測定は、井戸内枠が8世紀を示したが試料が最外年輪ではない。一方で樹皮の残る井戸外枠でウィグルマッチング法を行い、10世紀前半から中頃との結果を得た。こちらは遺物の年代と一致する。一方で18層の試料とブドウ属種子が縄文時代を示した。本来、Ⅶ層中に含まれていたものが井戸の掘削に伴って混入した可能性がある。また堆積土中から検出された火山灰は十和田八戸火山灰である。遺構の構築時期とは整合しないが、前述したブドウ属種子のように井戸構築時に下層から掘りあげた土に含まれていた可能性がある。出土した木製品の樹種は、アスナロ属が最も多い。今回同定された木材はすべて遺跡周辺で獲得可能であるため、集落内で加工が行われたと考えられる。大型植物遺体は栽培植物のイネやキビ、アサ、エゴマ等が多量に出土した。中でもアサは繊維を利用するだけでなく種子を食用や油として利用することが可能である。遺跡周辺では生活に有用な植物を栽培するための水田や畑地があったと想定される。貝はタニシの蓋のみが出土し、貝殻がなかったため井戸内で生息していたのではなく、外から混入した可能性がある。昆虫は、都市型昆虫と呼ばれるオサムシ科の地表性昆虫が多量に出土した。出土数の多さはエサ資源が多いことを表し、集落に多くの居住者が存在していたことを示唆する。また食植性昆虫の出土は、集落周辺の環境が栽培植物を植栽していたことを示す。

## 木製品

第1号井戸跡から出土した木製品のうち、本項では斎串と櫛について記載する。

斎串：井戸内枠内の堆積土から出土し、『日本の遺跡出土木製品総覧』(島地・伊東 1988)における上端の形状が円頭式にあたる。また、これまで青森県内では平安時代の斎串が4遺跡から11点が出土し、出土地点が不明である石上神社遺跡の1例を除き、すべて溝跡の堆積土から出土している。なお、熊沢溜池遺跡の第2号井戸跡の堆積土中から出土した木製品のうち、斎串に形状が類似するが加工木として報告された資料が1点ある(青森県教育委員会2018)。

櫛：井戸外枠内側埋土から出土した。これまで青森県内では平安時代の櫛は8遺跡から8点が出土し、いずれも炭化した横櫛である。破損しているため全体の形状はわからないが、『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所 1985)の櫛の分類によると、A型式(長方形)の肩部に丸みをもつⅡ型式にあたる。出土地点別では竪穴建物跡の床面が最も多く、他に八戸市岩ノ沢平遺跡の第166号土坑内ピット(青森県教育委員会 2000)や青森市朝日山(2)遺跡の第217号溝跡底面からの出土事例がある(青森県教育委員会 2003)。樹種は七戸町倉越(2)遺跡の1点が、静岡以西に分布するマン

サク科イスノキ属イスノキと同定されている(青森県教育委員会2005)。本遺跡の櫛は北海道、本州、四国、九州に分布するカバノキを素材とするが、生産を遺跡内で行っていたかは不明である。(藤田)

### 土師器

平安時代に属する遺構から、33,172.9g 出土した。最も多く出土したのは4区第3号竪穴建物跡からで、12,441.3g出土している。遺構外からの出土は8,358.5gで、1区と4区が多い。

土師器は坏、皿、甕、小型甕、ミニチュア製品が出土し、ほとんどの個体に海綿骨針が観察される。

坏：全てロクロ成形によるもので、器形をみると、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口唇部で僅かに外傾するものが主体である。内面に黒色処理が施されるものは2点図示した。このうち1点は外面調整から埒の可能性はある。胎土は甕と異なり、小礫の混入が少ない。焼成は軟質である。

口縁部から底部にかけて完形のものは少なく、口径と器高の関係(器高指数)を調査できるものは少ないため、明確な値を提示することは困難であるが、見込みが深い傾向にあることは確かである。

皿：すべてロクロ成形によるもので、器形は底部から直線的に開いて立ち上がる。口唇部は確認できなかった。底面は回転糸切無調整となっている。法量は、胎土は坏と同様に砂粒が少なく、器面摩滅が影響している可能性はあるが、海綿骨針は確認できなかった。

甕：器高が約30cm程度で口径が20cm前後のもの一群と、器高が15cm程度で口径が10cm前後の小型の一群に大別されるため、後者を小型甕として分類した。前者は破片を含めロクロ使用は認められず、全て非ロクロとなる。後者はロクロ調整が認められるが、少数である。

口縁部形態は、くの字状に屈曲し短く外反するもの、直線的に体部へ延びるものの両者みられる。口唇部は指先または布状調整具で作出している。

調整は、遺物の胎土が軟質であり、遺物洗浄の痕跡が容易になってしまう状況を勘案しながら、整形時の痕跡と明瞭に判断できるもののみ図化した。口唇部から頸部にかけては前述の指または布状調整具によるヨコナデ調整を施している。頸部に指頭圧痕が残存しているのも散見される(図20-2、図26-18)。体部上半の調整は観察できるものではナデ調整、下半はケズリ調整が卓越するようである。内面は全体がナデ調整で外面に粘土接合痕が残存するが内面をナデ調整を施し接合痕を消去している個体もある。調整は粗いものも多く、輪積痕を残したままになっているものが見られる。その他内面黒色処理する個体(図54-1)がある。底面調整は確認できたもので、無調整で砂粒が厚く付着しているもの(砂底)が4区から2点出土している。胎土には坏に比べ砂粒や小礫が多く混入している。略完形は第3号竪穴建物跡出土のことが多い。

第7号竪穴建物跡の堆積土から、外面に複数の平行する稜線が施された甕の破片とみられるものが出土した(図27-4・図27-5)。これらの遺物は胎土が砂や小礫が混入する土師器の甕の破片と考えられる。稜線全体に細かな筋(ナデ)が観察され、稜や沈線状に凹んだ箇所が稜線の走る方向にも観察できた。このことから土器焼成前に調整した痕跡と考えられ、その工具は摩滅した板材が考えられる。

小型甕に分類したもののうち、つば状突起が口縁下に造られる個体(図31-6)は、甕を模したものの可能性もある。

ミニチュア製品：遺構外から1点出土している。てづくねで、小型甕を模したものとみられる。

### 須恵器

4,413g出土した。最も多く出土したのは4区第3号竪穴建物跡からで、1,674.3g出土している。遺

構外からの出土は731.2gで、1区、4区が多い。

須恵器は坏・壺・甕が出土しており、特に壺の出土が多く、甕の出土量が相対的に少ない。

坏：外面に十字の火襷痕が確認できる。口唇部の先端は丸みを有し、体部上半から口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がるものが多くみられる。底部は回転糸切無調整である。体部外面にヘラ記号(図25-2)を有するものがある。胎土には海綿骨針を含む。

壺：口縁部形態は断面方形を呈し、強い面取り調整によって隆帯を意識しているものであり、形態及び外傾する角度が五所川原須恵器窯跡群のMZ 6・7号窯、MD 7・12号窯出土のものと類似する。ほかの型式のものはない。図18-3は底部に放射状圧痕が施され、断面三角形の低平な高台がつき、頸部と胴部の境界には押し引きにより作出されたリング状の突帯を持つ。頸部にヘラ記号が確認できる。調整は胴部外面上半がロクロナデ、胴部外面下反がケズリ、胴部内面下半がナデである。

甕：外面はタタキ調整、内面は鳥足状当具や無文当具の痕跡が観察される。胎土に海綿骨針が混入している。坏や壺に比し、接合し復元できた割合が少ない。

これらの土器(特に須恵器壺)の考古学的所見から、10世紀第1四半期の年代が導き出せる。

## 石器

石器はすべて1区から出土し、遺構内から18点、4,289.4g、遺構外から3点、84.3gである。遺構内から出土した石器の種類は台石、砥石、磨石、凹石、石錘、線刻礫、石核である。このうち台石、砥石は、出土状況や伴出遺物から、平安時代に使用された可能性が高い。その他の石器は縄文時代のものである。

図23-6・図23-7は第3号竪穴建物跡のカマド火床面から出土した。平坦面には擦痕が観察され、中央付近が凹んでいることから、板状の金属製品を研磨した痕跡の可能性もある。図23-8は破損品であるが、6面に平滑な機能面を持ち、一方に敲打痕を有する。形態から縄文時代の遺物と考えられるが、竪穴建物跡の床面から出土していることから平安時代に再利用されたとみられる。(工藤)

## 鉄生産関連遺物

今回の調査では、少量ながら鉄製品や鉄滓などの鉄生産関連遺物が出土した。重量で見ると、1区出土が9割以上を占め、残りは4区からの出土である。鍛冶関連遺構は検出していないが、羽口や炉壁の破片も出土していることから、調査区周辺で鍛冶作業が行われていた可能性は高い。

鉄滓は、いずれも精錬鍛冶に伴うものとみられ、金属鉄の残留を確かめるために小割された後に廃棄されている。椀形滓は、残存率が高いものでも、推定径10cm、厚さ4～5cm程度であったと考えられ、概して小型である。炉内で滓をずらして2回の操業を行った痕跡を確認できるものが多く、2回目の滓は径4cm、厚さ1.5cm程度とさらに小さくなる。ほぼ全面が打ち割られて形状が不明なものは、鍛冶滓として扱ったが、こちらに残存長が数cm程度の小さいものが多い。メタル度は最大でもMで、非掲載遺物も含めると金属鉄を含んでいないものが主体を占める。そのため、本遺跡周辺で行われていた鍛冶作業は、精錬鍛冶でも後半段階の工程と考えられる。

特徴的なものとしては、炉壁に由来する白色粘土や白色岩片が付着した滓があげられる。白色粘土は厚い部分で5mmほどの厚さがあり、滓との間に木炭痕が確認できるものがある。白色岩片は径1～5mmほどの大きさで、滓が噛み込んでいるものも確認できる。本遺跡から出土した石器石材に用いられている珪化・変質したデイサイトとよく似た様相を呈しており、身近な石材を砕いて混和材とし、



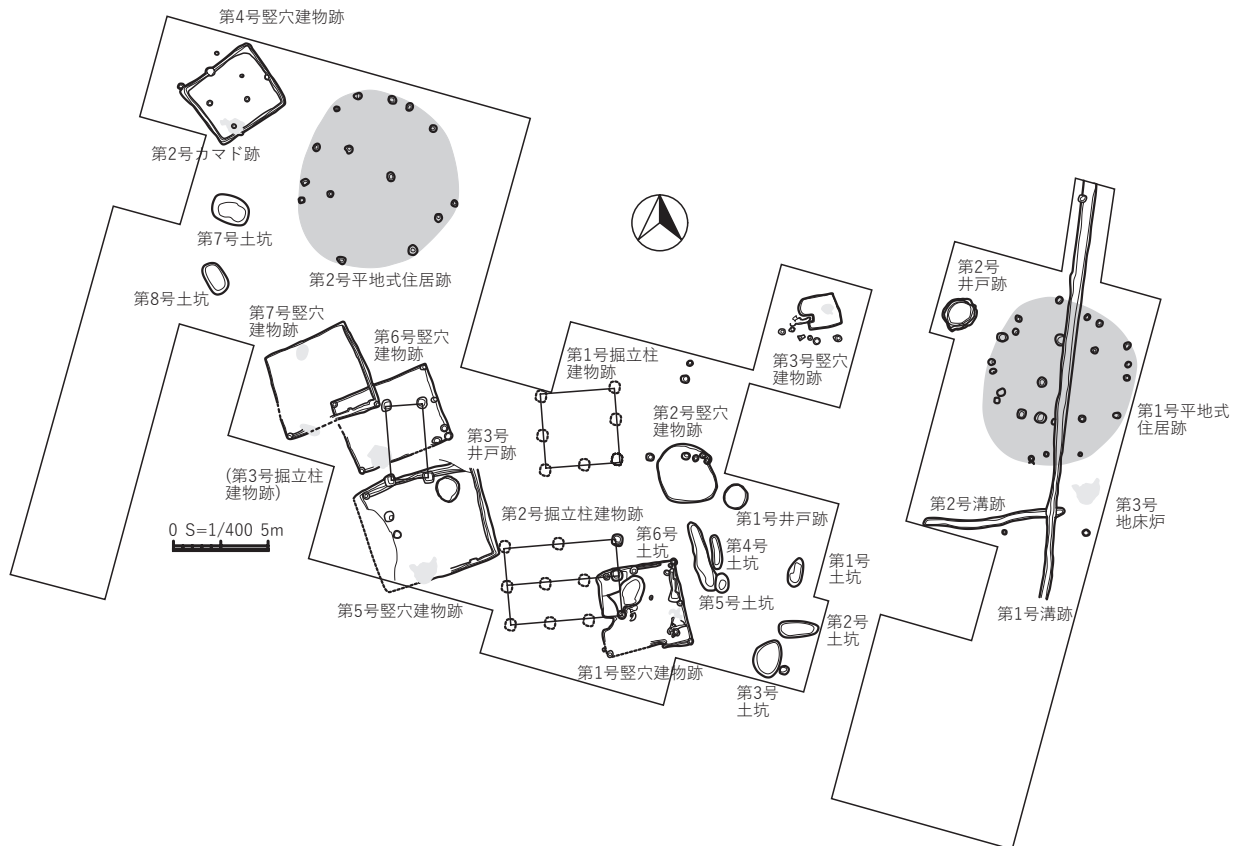
火床炉の表面に塗っていたものと考えられる。

周辺の遺跡では、狐野(1)遺跡で製鉄炉1基を検出しており、炉底滓のほか流動滓も出土していることから、製錬作業が行われたことが確認できる(五所川原市教育委員会1980)。製鉄炉は半地下式で前方(南側)が鍋底状に落ち込んでおり、炉壁の状態から3～5回の製錬作業が行われたと考えられている。周囲からは柱穴も見つかっており、上屋構造を持つ製鉄炉であったと考えられている。また、断定は避けているものの、精錬鍛冶を行ったと考えられる2号炉、炭焼き窯の可能性のある遺構も検出しており、製錬・精錬まで一連の作業を行っていた可能性が捉えられる。

本遺跡では、鍛冶遺構は検出されていないものの、製炭土坑1基を検出している。狐野(1)遺跡における遺構の組み合わせを考えると、調査区周辺にも精錬鍛冶に関わる遺構が埋蔵されていると考えられる。一方で、本遺跡出土の鉄滓は、平安時代の竪穴建物跡に廃棄されているほか、製炭土坑も平安時代の竪穴建物跡を壊して構築されていることから、鉄生産関連遺物の帰属時期については中世に下る可能性があることも指摘しておきたい。(中門)

### 第3節 中世以降

本遺跡では中近世の陶磁器(図55-6～13)が出土しているものの、中世以降と明確に判断できる遺構は確認できなかった。北に位置する石田(1)遺跡では、平安時代の竪穴建物跡の堆積土を掘り込む掘立柱建物跡と井戸跡が確認された(図57)。掘立柱建物跡の軸方向が揃うため、これらは同時期の可能性がある。遺物は16世紀の青磁と志野焼が出土している。また東側に位置する沢田遺跡(大坊館



※(五所川原市教育委員会1995)を再トレース後、一部加筆

図57 石田(1)遺跡 遺構配置図



跡)との間からは同年代の染付が出土している(五所川原市1998)。今回の調査により出土した16世紀の瓦質土器はこれに続く出土である。こちらは16世紀に津軽為信により攻略されたとされる飯詰城遺跡(飯詰高楯城)を飯詰の防御の要とした時、これまで指摘されることの少なかった、中世の飯詰川左岸における活動の存在を想起させるものである。

一方で近世の遺物は比較的少なく、本遺跡が位置する飯詰川左岸は、近世は居住域としてほとんど利用されていなかったと考えられる。近世の飯詰地区は街道である下之切通りを中心に町場として発展し、本地域が居住域から現在の水田につながる生産域へと変遷したものと推察される。(工藤)

## 引用参考文献

- 青森県 2001『青森県史 自然編 地学』
- 青森県 2005『青森県史 資料編 考古3』
- 青森県教育委員会 1977『石上神社遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第35集
- 青森県教育委員会 1984『下之切通り(小泊道)』 青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1994『稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第163集
- 青森県教育委員会 1999『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第270集
- 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 青森県教育委員会 2002『隈無(8)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第313集
- 青森県教育委員会 2003『朝日山(2)遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第350集
- 青森県教育委員会 2005『倉越(2)遺跡 大池館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
- 青森県教育委員会 2006『林ノ前遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2013『十三盛遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第526集
- 青森県教育委員会 2017『青森県詳細遺跡分布調査報告書29』青森県埋蔵文化財調査報告書第587集
- 青森県教育委員会 2018『熊沢溜池遺跡・上野遺跡Ⅲ・郷山前村元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第591集
- 青森県教育委員会 2020『青森県遺跡詳細分布調査報告書32』青森県埋蔵文化財調査報告書第615集
- 青森市教育委員会 2000『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第52集
- 青森市教育委員会 2001『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 五所川原市 1998『五所川原市史通史編』
- 五所川原市教育委員会 1979『狐野製鉄遺跡(第一次発掘調査概報)』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 五所川原市教育委員会 1980『狐野製鉄遺跡(第二次発掘調査概報)』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 五所川原市教育委員会 1983『福泉遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 五所川原市教育委員会 1994『石田遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 五所川原市教育委員会 1995『石田遺跡Ⅲ』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 市浦村教育委員会 2002『実取(2)遺跡』市浦村埋蔵文化財調査報告書第14集
- 籠瀬良明 1978「津軽平野の多条並列灌漑水路」『東北地理』30巻1号
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 木立雅朗 1997「5. 製炭土坑との区別」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』
- 工藤清泰 2021「飯詰城」『続・東北の名城を歩く 北東北編 青森・岩手・秋田』吉川弘文館
- 齋藤岳 2015「津軽地方の用水路-地理学及び考古学視点からの考察-」『青森県考古学』第23号
- 島地謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣
- 辻圭子・辻誠一郎・南木睦彦 2006「青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用」『植生史研究特別第2号 三内丸山遺跡の生態系史』日本植生史学会
- 辻裕司 2001「横櫓—横櫓の分類と生産遺跡—」『研究紀要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 鉄関連遺物の分析評価研究グループ編 2005『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録近畿古代編』
- 日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会 2016『第Ⅱ分科会 北東北9・10世紀社会の変動研究報告資料集』